

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370600

研究課題名(和文) 複言語サポーターの複言語・複文化能力に関する研究 言語使用の実態調査を通して

研究課題名(英文) Research on the Plurilingual and Pluricultural Competences of Plurilingual Supporters through the Study of Language Usage

研究代表者

徳井 厚子 (TOKUI, Atsuko)

信州大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：40225751

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：複言語サポーターへのインタビュー調査の分析結果について論文発表及び学会報告を行った。複言語サポーターは文脈に応じて言語を使っていた。例えば相談場面で感情的な面や個人的な内容を聞く場合、具体的な説明の場合、緊急時の状況説明の場合、母語で行っていた。また、複数の言語の融合や言語スタイルの調整を行っていた。複言語サポーターは相談者と一定の距離を保ちつつ支援を行っていた。関係の相対化や、関係性の変化の重要性も挙げられた。また、複言語・複文化能力の観点から考察した結果、文脈に応じての自己の位置づけや複数の言語使用を変化させ、異文化間調整を行い、ネットワーキングを行うコンピテンシーの重要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The result of this research are as follows.

1. PSs(plurilingual supporters) make use of language according to context. For example, when listening to other's expression of feelings, listening to personal problems, giving a concrete explanation, or explaining the event of an emergency, PSs communicated in their native language. They also combined different languages or communication style. 2. They provide support while maintaining a certain distance from the person they talk to. The interviews also highlighted the importance of "relativizing relationships" and "changing the relationship according to the situation". 3. It was considered competencies in plurilingual and pluricultural terms. The results indicated that the important competencies for PSs are the ability to change one's own standpoint according to the situation, make use of multiple languages, make adjustments to different cultures, and engage in networking.

研究分野：日本語教育 異文化コミュニケーション

キーワード：複言語サポーター 言語使用 インタビュー 複言語・複文化能力 関係性

#### 1. 研究開始当初の背景

現在、地域において外国籍住民のサポートを行う複言語サポーター（本人自身が外国にルーツを持ち、文脈に応じて複数の言語を駆使しながら地域や学校で外国人に支援を行っている者）の存在は重要であると考えられるが、複言語サポーターに必要な能力や言語使用の実態に関する研究はほとんど行われてこなかった。総務省(2006)は多文化共生について「国籍や民族の異なる人々が、互いの文化的違いを認め合い対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」としている。多文化共生を実現していくためには複言語サポーターの存在は重要であると考えられる。しかし、この存在には今まであまり光があてられなかった。本研究では、複言語サポーターへの調査を通して日本の国内における複言語サポーターに必要な能力や言語使用の実態を明らかにすることを目的とした。

#### 2. 研究の目的

本研究では、日本国内の地域や学校において外国籍住民（子ども）をサポートしている複言語サポーターへのインタビュー調査を行い、言語使用やコミュニケーションの実態について明らかにするとともに、これらの調査結果を踏まえ、欧州評議会が提案している複言語・複文化能力を日本の文脈から多角的に再考した上で、複言語サポーターに必要な能力を提案することを目的とする。

#### 3. 研究の方法

##### (1) 複言語サポーターへのインタビュー調査

国内において、地域や学校で外国人にサポートを行っている複言語サポーターに対してどのように複数の言語を駆使しながら支援を行っているかを中心にインタビューを行った。インタビューの対象は、地域における外国人相談員、日本人コーワーカー、学校への支援員等である。

##### (2) 複言語・複文化主義についての文献研究及び多角的検討

欧州評議会が複言語・複文化主義にもとづき提案した複言語・複文化能力は、複言語サポーターの言語使用や言語能力を考える際、参考になる部分が多い。当研究では、複言語・複文化能力についての文献研究を行った。

##### (3) 複言語サポーターの言語使用及び能力についての考察

(1) で得られたデータをもとに、複言語サポーターの言語使用およびコミュニケーションの実態、必要な能力について考察を行った。その結果を国内外の学会での発表及び論文執筆を行った。内容の詳細は4. 研究成果の通りである。

#### 4. 研究成果

インタビューの分析の結果、以下が明らかになり、学会発表及び論文発表を行った。

(1) 複言語サポーターの言語使用について  
複言語サポーターの語りから、複言語サポーターは文脈に応じて言語を使い分けながら支援を行っていることが明らかになった。例えば、「教室内では日本語を用いるが、授業外では母語も用いる」といった場面での使い分けに関する語りが見られた。また、母語を用いる場合としては、例えば、相談場面で相手から不安や怒りなど感情的な面を聞く場合、個人的な内容を聞く場合、制度やシステム等の具体的な説明を行う場合、緊急時の状況説明の場合が挙げられた。母語を話すことの意味としては、「安心してもらうため」や「自分を思い切り出せる場」等が挙げられた。

また、複数の言語の融合や言語レベルの調整に関する語りも見られた。複数の言語の融合については、日本語と母語を話の途中で切り替える等しながら状況や文脈に応じてコミュニケーションを行っている場合が挙げられた。また言語レベル（表現）の調整に関しては、複言語サポーターが相手とコミュニケーションする文脈を重視し、相手に通じる言語表現に調整しているという点が挙げられた。また母語でも「やさしい母語」を用いながらサポートしているというケースが見られた。また、複言語サポーターからだけではなく当事者から調整がなされるというケースや調整の限界と困難に関する語りも見られた。

##### (2) 外国人相談員と「関係調整」

外国人相談員の語りを、「関係調整」という観点から分析した結果、以下が明らかになった。

1) 外国人相談員は相手と築くだけでなく、相手と距離をとったり、相手との関係を調整することの大切さに関する語りが見られた。また相手のプライバシーに入り込まないことの重要性についての手かげりも見られた。

2) 相談者が相談員に頼りすぎずに、相互に自立した関係を築くことの大切さに関する語りが見られた。また自立するための条件として、本人が自信を持つことの重要性や、制度面での知識の必要性が挙げられた。

3) 相談員が相談者との関係を絶対化せず、相対化していくことの大切さに関する語りが見られた。

4) 状況や相手によって関係性を変化させることの大切さに関する語りが見られた。例えば相談者の個人差や社会的状況の変化に応じて相手との関係を変化させながら対応し

ているという語りが見られた。

5) 時間とともに相談員と相談者との間の関係性を変化させていくことの大切さに関する語りが見られた。相談員としての経験を積むことによって相談者との関係性を変化させていくことの必要性について気づきがあったといえる。

#### (3) ウェルフェアの観点からの複言語サポーターのコミュニケーションの考察

外国人相談員の語りを、ウェルフェアという観点から分析・考察した。生活者としての外国人が一人の人間として幸せな生活をしていくための根底部分としてマズローのモデルの生理的欲求・安全の欲求の重要性を挙げ、外国人相談員がこれらの根底の部分を様々な側面から支えていることをインタビューから明らかにした。

語りを分析した結果、以下が挙げられた。労働については相談内容の変化、(当事者が)言語ができないことによる不安、(当事者が)制度を知らないことによる誤解が挙げられた。離婚・DVに関しては、原因を外国人であることに帰属しがちなこと、長期的な視野に立った支援の必要性、当事者の主体的な選択の必要性、真意の見極めの必要性が挙げられた。また医療の文化差やコミュニケーションギャップの説明の必要性が挙げられた。

#### (4) 複言語サポーターにとってのコンピテンシー

複言語サポーターの語りを分析し、欧州評議会が提案した複言語・複文化能力との関わりから、複言語サポーターにとって必要なコンピテンシーについて考察した。その結果、以下が明らかになった。

1) 文脈や状況に応じて自己の位置づけを変化させたり複数の言語の使用を変化させるコンピテンシーの重要性を示唆する手かがりが見られた。例えば、相手の文脈の理解の必要性についての語りや文脈に応じて位置づけを変化させることに関する語りが見られた。

2) 異文化間の調整のコンピテンシーに関する語りが見られた。双方の異なる文化差を理解し周囲に説明しながら文脈に臨機応変に応じながらやり方を選択したという語りが見られた。

3) ネットワーキングのコンピテンシーに関する語りが見られた。例えば、ネットワーキングにおける自立の必要性に関する語りや、ネットワーキングの仲介の重要性に関する語り、日常のネットワーキングの重要性に関する語り、ネットワーキングの厚みを増すことに関する語りが見られた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

徳井厚子「ウェルフェアのためのコミュニケーション支援-外国人相談員の語りから」ヨーロッパ日本語教育 21 331-336 2017(査読なし)

徳井厚子「複言語サポーターにとってのコンピテンシー 複言語・複文化能力との関わりを中心に」信州大学教育学部研究論集 10号 49-57 2017(査読なし)

徳井厚子「外国人相談員のコミュニケーション 「関係調整」に焦点をあてて」信州大学教育学部研究論集 9号 123-130 2016(査読なし)

徳井厚子「複言語サポーターの語りにみるカテゴリーの構築」『リテラサイズ』16巻 25-32 2015(査読あり)

徳井厚子「複言語サポーターはどのように複数の言語を使用しているのか 語りからみえてくるもの」『多言語・多文化-実践と研究』第6号 24-42 2014(査読あり)

[学会発表](計8件)

徳井厚子「言語サービスをクリティカルに問い直す 教員養成における実践の試み」プリンストン日本語教育フォーラム,2017,5,14

徳井厚子「外国人支援のためのネットワーキング 複言語サポーターの語りから」CAJLE 年次大会、Niagara,カナダ 2016 8,17

徳井厚子「ウェルフェアのためのコミュニケーション支援 外国人相談員の語りから」(カフォスカリ大学、イタリア) 2016,7,7-9

徳井厚子「複言語サポーターにとってのコンピテンシー 語りから示唆されるもの」異文化間教育学会大会、桜美林大学 2016,6,4

徳井厚子「支援のコミュニケーションにおける「関係構築力」の再考」第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム(ポルドーモンテニユ大学、フランス) 2015,8,27-29

徳井厚子「複言語サポーターにとっての能力観」夏期公開研究会-新しい言語教育観に向けて(信州大学) 2014,9,14

徳井厚子「複言語サポーターにとっての複言語・複文化能力とは」ヨーロッパ日本語教育シンポジウム(リュブリャーナ大学、スロ

ベニア) 2014,8,27-30

徳井厚子「複言語サポーターの「支援の語り」にみる「外国人」の位置づけ」異文化間教育学会 同志社女子大学 2014,6,7

〔図書〕(計1件)

加賀美常美代・徳井厚子・松尾知明外7名  
『異文化接触における場としてのダイナミズム』明石書店(11-13,121-135)2016

6. 研究組織

(1)研究代表者 徳井 厚子(TOKUI, Atsuko)  
信州大学・学術研究院教育学系・教授  
研究者番号: 40225751